

◎特別寄稿

はるかぜの日

日和聡子

音楽から出会う

中原中也

庄司達也

◎テーマ展示

四季詩集

— 中也とめぐる春夏秋冬

◎特別企画展

大岡昇平と中原中也

◎企画展

中也、この一篇—「帰郷」

文士の肖像 林忠彦写真展

◎新収蔵資料紹介

中垣竹之助宛 中原中也葉書

小林秀雄著作 初版本一式

◎開館25周年を迎えて

◎資料修復保存事業について

◎記念館ニュース

第3回 ぼうしの詩人賞

～あつまれ! 未来の中也たち!～

中也忌～中也に捧げる夕べ

「山羊の日」特別展示

(矢追順子宛献呈署名入り『山羊の歌』)

主なできごと(平成30年度記念館行事記録)

第24回中原中也賞

平成31年度記念館関連行事予定

# 中原中也記念館 館報 2019

24

Public relations magazine

第24号

Nakahara Chūya  
Memorial Museum

2019年 中原中也記念館は開館25周年

# はるかぜの日

日和聡子

おもてでは風が吹き荒れていた。巻き上げるような鋭い突風の音がきこえる。窓越しに明るいう日差しが部屋へ入る。暦の上ではまだ冬。しかし春は近い。日差しはすでにその兆しをはらんでいる。わたしは窓を閉めた部屋のなかで、中原中也の詩集を読み返していた。こんな日だからだろうか。これまではあまり気にとめなかった詩に目がとまった。

はるかぜ

あゝ、家が建つ家が建つ。  
僕の家ではないけれど。

空は曇つてはなぐもり、  
風のすこしく荒い日に。

あゝ、家が建つ家が建つ。

僕の家ではないけれど。

部屋にゐるのは憂鬱で、  
出掛けるあてもみつからぬ。

あゝ、家が建つ家が建つ。

僕の家ではないけれど。

(かん)  
鉦の音は春風に、  
散つて名残はとめませぬ。

風吹く今日の春の日に、  
あゝ、家が建つ家が建つ。

〈僕〉の屈託と、それをはねのけ投げ出し春風にまかせて吹き飛ばそうとするような、意気と憂さとのあいだで揺れ動く心のありようが感じられる。あたたかさをつめたさが入りま

じつたいきおいのある風が、詩のなかを動きまわる。〈あゝ、家が建つ家が建つ。／僕の家ではないけれど。〉とできるだけ威勢良く、しかしけつして空元氣や強がりを言う口調や声音にはならぬよう、半ば他人事のようにそう唱えては、自虐となる一歩手前で風に放る。各連において繰り返されるはじめの二行とは高低差をつけて綴られるあとの二行は、そこだけ取り出し続けて読むと、塞ぎ込んではいないがどこか冴えない調子の声がかきこえる。はなやく気配もありながら、すつきりとは晴れない模様空と心。鼓舞するのか揶揄するのか、言祝ぐのか自嘲するのか、浮くようで沈み、沈むようで浮きあがる、そんな定まらぬ心地のなか、どうにか自分を支え、保ち、奮い立たせようともしながら、〈僕〉は何度もあの言葉を繰り返す。それは、さかんに建築作業を進める〈鉦の音〉さえ残らず吹き散らしてしまうほどの、荒くも小気味よい今日の春風にさらして跡形もなく消し飛ばしてももらうために、わざわざ言葉にしているかのようにもある。微妙な均衡を保つ〈僕〉の一日。「春風」ではなく、「はるかぜ」。このタイトルが、詩を照らす。

この詩を繰り返し読みながら、わたしは一方で、近所のとある一軒の家のことを思い浮かべていた。いつも行き来する道の途中にある、顔も名前も知らない人の、新しい家。昨年の秋だったか、ある晩そばを通りかかると、つい先日までそこにあった木造の家屋が取り壊され、黒黒とした土の地面があらわになっていた。

すでに建て替えが決まっているのか、地鎮祭が執り行われたあとらしく、四方に立てられた笹竹に注連縄が張られたものが残されていた。以前そこにあったのは、わたしの知らない、しかし懐かしい時代を思わせる、二階建ての家だったように思い返す。いつも通りがかりに意識するともなしにちらりと視界の端に映り込むくらいのことであつたから、はっきりとした記憶というより、ぼんやりした印象が残るだけだ。かつては、二階の窓に設けられた手すりの向こうに、ペーージュ色のソバージュに似た毛並みの犬が、よく顔をのぞかせて外を見ていたりした。犬、というより、人、のようなアンニュイな雰囲気をもとっていた。そこにそうして居るだけで、何か特別なワンションを思わせた。いつの頃からか見なくなり、それから何年かが経つたある日、その家もすっかり姿を消した。そして今は、そこに完成間近の新しい家が建っている。これが月日の流れというものなのか。そうやって、地面は呼吸をしてきたのだろうか。

今にして気づくのは、かつて通りがかりに見るともなくその家を目にしたたびごとに、わたしのなかに微量の詩が補充されていたのだということだ。おそらくそれは、この家にかぎったことではない。日頃とくに気にもとめず、ことさら関係というものもなく、ただ何気なく目や耳にしているあらゆる見慣れたものや風景からも、きっとそれはおりおりに注ぎ込まれているのだと思える。今ここで述べている詩とは、文芸作品としての「詩」ではない。

のちに「詩」のかたちをもとり得る、いつか「詩」

を形成するはたらきをしその構成物ともなる可能性を持つ、さまざまな要素や成分やエネルギーとしての詩のことだ。そのなかには、すでに詩興や詩情などとして意識されるものも含まれるが、それ以前の、いわば粒子のようなものである。人は日日、そうしたものを気づかぬうちに摂取している。栄養や毒や空気のように。詩はかならずしも「詩」のかたちをとるとはかぎらない。文芸作品のほか、美術や音楽などさまざまなジャンルの芸術作品にとどまらず、日常的なもの、実用的なものに至るまで、森羅万象、ありとあらゆるかたちをとり、またそれらにまざり包まれて、どこかの誰かに、新たに詩を届けるものともなつてゆく。ちょうど、今はいらないあの家が、あの建築が、そこでの誰かの暮らしの気配や痕跡が、そうしたものを醸し発していたように。

その日読み返した「はるかぜ」は、こうしたところへわたしをはこんだ。「詩」を読むよることや醍醐味には、書かれたテキストを味わうことがまずある一方、それを受けて、読者のなかで新たな回路が生じ、独自の展開や動きがはじまる機会がもたらされることもあるだろう。それはなにも、特異なことや、画期的なものである必要はない。何でもない記憶の一場面がよみがえったり、ふと思いがけないイメージや着想を得たり、長く眠っていた感情や感覚が呼び覚まされるといったささやかなこともまた、「詩」の大きな作用や恵みの一つ一つであ

るのだ。

中原中也の詩を読み返すなかで感じたことの一つは、春夏秋冬、朝昼晩、晴れ雨曇り、月星日や風雲……などと関わり、それらとともにある感情や情景があらわされる作品が多いためか、作中の気温や湿度を含む空気が、読む者の体温や体感にすつとなじみ、それによってある種の共感や理解の下地が即座に設けられる、ということだ。それは自ずと人の郷愁を誘うものともなる。中原中也の詩の言葉が心に残る背景、ベースには、肌で感じる光と闇、体感温度が敷かれている。そこで読者の五感にまず訴えるのは、特殊なものではなく、あくまで自然でやさしいものだ。だからこそ、その上に刻まれ立ちあらわれる言葉の姿や表情が、際立ち艶めき力を持つ。その詩がときに強くときにやわらかく人に影響しつつ親しまれる理由の一つは、そうした点にもあるのかと気づかされる。

第二詩集『在りし日の歌』に収録される「村の時計」は、叙情性の高い中原中也の作品において、異色の一編とも思われる。この詩を読み返すなかで、わたしは不思議な味わいと体感を得るとともに、詩を読むときの自身の五感の動き、はたらきについて、あらためて強く意識した。

#### 村の時計

村の大きな時計は、  
ひねもす動いてゐた

らゆるぎなく、一行一行に満ちるものには、見た目よりもはるかに膨大なものが詰まっている。非常に単純なようであり、見れば見るほど、これ以外にない、というより、逆によくこのように書かれたことだと思われるような、ほとんど神秘に近いものを感じ、吸い込まれてしまう。読むたびに、違うものが見え出し、解釈と感動のありかたが更新される。作中の静けさに耳を澄ますときこえてくる、

（ぜいぜい）という空気のふるえ。目を凝らすと見えてくる、沢山の（小さなひび）。たとえばこうした文字による一連の表現と、それらを読み取り作品全体を正確に精緻に感受し理解しようとする人間の精神や能力や機能（それらの潜在的なものや限界を含め）のありようにも、今さらながら気づき驚く。そして、こうした分野や次元において、「詩」がこれまでに成し、果たしてきたこと、その役割と重要性とこれららについても、思いを致す。

「詩」を読むこと、「詩」を書くことは、ともに、「詩」とはなんぞや、をめぐる行為であるとも言える。その解決をめざしてわたしは「詩」を読んだり書いたりしているのではないが、「詩」を求めるかぎり、そこから離れていることはできない。中原中也の詩を読み返すことは、わたしにとっては自らを振り返ることでもあった。厳しい現実と、懐かしい思いの向こうに、新しい地平がわずかに見えてくるような気がした。

その字板のペンキは、  
もう艶（つや）が消えてゐた

近寄つてみると、  
小さなひびが沢山にあるのだつた

それで夕陽が当つてさへが、  
おとなしい色をしてゐた

時を打つ前には、  
ぜいぜいと鳴つた

字板が鳴るのか中の機械が鳴るのか  
僕にも誰にも分らなかつた

作者の心が奇妙に風いだひとときに書かれたものであるかのような、高い集中力を感じた。どこにでもありそうで、そこにだけあるひとつの真空時間を思わせる。その場所がどこであれ、限定されたところの情景として、地面までもが見えるような具体性を持ちながら、しかし生々な現実感とは異なる様相を呈する。この、一個の無限とでも呼びたいような詩空間は、一体何なのであろう。一読して、わからない、と感じるようなところはどこにもない。どの表現も、易しく素朴でありなが

#### Satoko Hiwa

#### 日和 聡子 （ひわ・さとこ）

1974年、鳥根県生まれ。詩人、作家。

2002年、詩集『びるま』で第7回中原中也賞、2016年、詩集『砂文』で萩原朔太郎賞を受賞。他の詩集に、『唐子木』(2001年)、『風土記』(2004年)、『虚仮の一念』(2006年)、『現代詩文庫 日和聡子詩集』(2014年)などがある。小説では2012年、『螺法四千年記』で野間文芸新人賞。その他、『おのごろじま』(2007年)、『瓦経』(画／金井田英津子 2009年)、『御命授天纏佐左目谷行』(2014年)、『校舎の静脈』(2015年)などがある。

# 音楽から出会う 中原中也

庄司達也

文学者の愛蔵品や旧蔵品、遺産の品々をまとめた目録を手にした時、大きな喜びとでも云うような想いを持つのは、遠く時空を超えてある彼らの嗜好や思考の有り様に思いを致すことが叶うからなのでしょう。作品を創作し、世界を構築してゆく彼らの意識に自身のそれを重ねることで、彼らの美の淵源にたどり着いたような錯覚を覚えることもあります。また、ある品の名や書籍の名前から、彼らの思索の基盤に直接に触れたような、創作の「種」を彼らと一緒につまみ上げたような、そんな知的な発見を体験することもあります。

『新編 中原中也全集』の別巻に収載されている「中原中也所蔵レコード一覧」を初めて手にした時、さまざまな興奮を伴って「知」の情報たちが無警戒な僕の懐に飛び込んできたことを聴く道具としてのみあるわけではないのです。その意味で、中也のコレクシヨン・リストは、当時の蓄音機の利用の実態と重なるわけですが、もう少し細かに見てみると、そこにはリストを手にした者の好奇心をくすぐる楽しい情報が多く載っているのです。

ソプラノ歌手マリオン・タリー「楽しき吾が家」とエリザベス・シューマン「子守唄」が収められた一枚は、「HL191A」との番号が振られています。この一枚は、日本ビクターがホームライブラリー（HL）のシリーズとして制作したもので、その名の通り、当時の良き家庭に備えるべき音楽を厳選し、セットにして売り出したベストセラー商品です。一〇枚を一セットとして幾つものセットが企画、販売されたのですが、そのうちの一枚が、中也の手元（或いは中也没後の中原家）に残されていたわけです。両面共に当時人気の名盤からの選択で、このシリーズでしか手に入らない演奏ではありませぬ。しかし、何故か、「HL」のクレジットのある一枚が残っているのです。このことは、セットで求めた一枚がたまたま今残されているだけなのか、それともこの一枚だけを中也は入手して聴いていたのか、うれしい想像は膨らみます。セットでの入手であれば、中也自身の西洋音楽の受容の形が、与えられた定型の枠に大きく依存していたような印象を持ちますし、単独一枚での購入であったのであれば、当時の人気ソプラノ歌手を選ぶ音楽知識の基層の一端が確認されます。

を覚えていきます。一七枚のSPレコードの情報を収載したリストには、西洋のクラシック音楽の名盤の名が幾枚も載っています。そして予想されてはいましたが、やはりありました、フランス語の教材としてのレコードです。丸山順太郎陸軍大学校教授が教授する「仏蘭西語学習」の一枚です。この一枚の入手の時期は定かではありませんが、アテネ・フランセへと通い、フランス語を自らのものにしようとしていた中也の姿が思い浮かびます。蓄音機は音楽を聴く道具、というようにだけ捉えているとすれば、それは思い込みの所産です。「蓄音機」は、まさしく「蓄」「音」「機」であり、例えば夏目漱石「野分」に「無駄口を叩く学者や、蓄音機の代理をする教師が露命をつなぐ月々幾片の紙幣は、どこから湧いてくる」とあります。必ずしも音楽

私たちが手にしている「中原中也所蔵レコード一覧」は、あくまでも、今に残され、或いは結果として残ったレコードたちのリストです。これ以外にも多くのレコードを所蔵していたであろうことは、中也の周辺の人々の証言などからも伺い知る処です。過大な評言を慎まねばならないのは、中也の多くあったコレクシヨンの一部としてこのリストを見つめねばならないからです。

さて、残った、残された、という意味から云えば、ピアノリストのウィルヘルム・ケンプによるベートーヴェン「月光」の一枚は、更に注目されるべき一枚です。ケンプは日本でも大変に人気のあるピアノリストで、特にベートーヴェンの楽曲の弾き手として、絶大な人気を誇っていました。詩人が虎になる物語の「山月記」で知られる中島敦も、ケンプの来日コンサートやレコードコンサートに出掛けていったことが知られています。そのケンプにとって「月光」は代表的な楽曲で、録音は複数回にわたってなされています。そこで注目されるのは、中也が日本でプレスされた日本ポリドール製のレコードではなく、「PIANO/4m Sonate cis-moll op.27.2(Mondscheinsonate)」とラベルにある輸入盤の一枚を蔵していたということ。中也はどのようにしてこの一枚に出会い、入手したのでしょうか。日本ポリドール盤の他の演奏と聴き比べた結果として選ばれたのでしょうか。そうだとすれば、そこには他の録音には感じられなかった魅力がある事になります。しかしな

がら、恐らくは、そのような経緯は無い形で中也所蔵の一枚に加わったのでしよう。当時のレコード盤事情から想像すると、それほど選択が許された時代ではありませんので、店先で見かけたのか、或いは友人から求めたのか、借りたまま返さずにいたのか、日記や書簡に残るレコードに関する記述が詳しくはないので想像するしかないのです。さらに言えば、通常は1分間に七八回転というのがSPレコードの標準的な回転速度なのですが、この一枚は八〇回転の録音盤であるのかも知れません。それは、僕がこの一枚にたどり着いた時、店員のお一人が「八〇回転で再生してくださいよ」と伝えてきたからです。中也は、この店員さんの云うように八〇回転で再生したのでしょうか。それとも通常のレコードと同じく七八回転で再生したのでしようか。もしも七八回転だとしたら、中也にとってケンプの「月光」は、少しかキーが低く、少しだけテンポが遅いものとして聴こえたことになりそうです。この一枚に、中也はどのような感想を持ったのでしょうか。音楽だけでは無い、中也の音感と云う事にも及ぶ話題となるのかも知れません。ちなみに、「月光」のレコードは元々は二枚で構成されているのですが、中原家に残されたのは一枚だけです。ラベルには、「3」(A面)と「4」(B面)と書かれた「小片」が貼り付けられています。恐らくは、中也は前半部分の演奏も愉しんでいた事でしょう。「中也の筆跡と推定」とのリストの記述がそのように導いてくれるのです。

れていたのです。「ラジオを修繕、野球放送、ベトーヴェンを聴く」(前述「年譜」一九三六年九月二三日の記述)、「ラジオでモーツァルトを聴く」(同、一〇月三〇日の記述)は、ラジオを通して蓄音機の流す音楽に触れていたことを伝えてくれます。例えば、後者は、日本放送協会博物館に残された番組に関する記録によれば、ジョン・バルビローリが指揮棒を振り、ヤッシャ・ハイフェッツがソリストとして演奏した、ロンドンフィルハーモニー管弦楽団の「ヴァイオリン協奏曲第五番イ長調 K.319」で、所謂「トルコ風」と呼ばれる楽曲でした。第二放送の「名曲鑑賞(レコード)」の時間で午後七時三〇分から八時までの放送であったようです。中也は「日記」に「モツァルト、グイオリン・コンチェルト第五番イ長調をラヂオで聴いて感銘す。／もうもう誰が何と云つても振向かぬこと。詩だけでもすることは多過ぎるのだ」と綴っています。この演奏から大きな感興を得た事が伝わってきます。かつては詩人の萩原朔太郎が「機械でキズだらけのレコードをかけてる時にそっくり」(「ラヂオ漫談」『中央公論』一九二五・一二)だと揶揄したラヂオから流れてくる音ではありましたが、音楽に出会う大切なツールとなった時代なのです。

一九〇〇年代の初めにロンドンに留学した夏目漱石は、弟子の寺田寅彦に宛てた書簡の中で、イタリアンソプラノ歌手アデリーナ・パッティ

ところで、中也全集の「年譜」を紐解いてみると、前時代までの作家たちの記述にはあまり見られなかった、「ラジオ」放送に関する事柄が散見されます。我が国に於けるラジオ放送は、一九二五(大正一四)年三月に始まり、月の初めの試験放送を経て二二日から仮放送が開始されたのです。そこから約一〇年後の一九三五(昭和一〇)年六月一四日、作曲家でスルヤのメンバーであった諸井三郎が曲を付け、ソプラノ歌手の太田綾子が歌った中也「春と赤ん坊」がJ〇A K(東京放送局)の番組「独唱」で電波に乗りました。また、半年後の一月一〇日には、J〇B K(大阪放送局)が同じく太田綾子の「妹よ」を「詩曲独唱」という番組で放送しています。ラジオ番組がパリに留学してフランスの楽曲を多く自らのものにした太田綾子が歌う中也詩の曲を流し、新聞にもその歌詞が載る時代を迎えていたのが、一九三〇年代の後半という時代です。中也は、音楽団体スルヤなどとの交流を含めて積極的に音楽というジャンルに関わった詩人であり、それはまた、同時代の文学者たちの歩みと軌を一にすることもあったのです。中也よりも少し早くにアテネ・フランスに通った坂口安吾などが、同校で知り合った仲間たちと共にサティやドビュッシーなどのフランスの現代音楽に傾倒していったのにも似ています。また、ラジオは、生の演奏も多く流しましたが、当然のことながらSPレコードを音源として使用することも多くありました。中也は、ラジオを通して、SPレコードの楽曲に触

のコンサートに行くことを伝えています。一流の演奏家の音楽を聴こうとすると、日本人にとっては長らくヨーロッパに行くことをせねば果たされない時代でした。それが一九〇〇年代を迎えた頃になると、演奏家たちが日本に演奏旅行にやってくる、或いは留学していた日本人音楽家たちが帰国し、自ら演奏会を開く時代になっていったのです。漱石よりも二五歳年下の芥川龍之介は、学生時代から音楽会へと熱心に足を運びました。そこには、来日を果たした海外の演奏家の演奏会なども含まれており、日本が音楽面でのマーケットとしても十分に成り立つ国になったことが知られます。この流れは、フランス人ピアニストのジル・マルシエックスの連続公演をモチーフにした梶井基次郎「器楽的幻覚」によっても明らかで、一九〇七年生まれの中也が青年期を迎えた昭和初年代は、さまざまな媒体を通して音楽を身近に置くことが出来る時代となったのです。中也が音楽と積極的に関わろうとした昭和という時代はSPレコードの国内生産も順調に進み、その価格もかつてのものと比較して随分と安くなった時代です。来日する音楽家たちも増え、西洋音楽が、西洋の芸術が求める者たちの近くにあった時代です。中也の音楽との関わりを見つめる際に、このことはとても大切な事柄のひとつとなるのだと思われるのです。

## 庄司 達也 (しょうじ・たつや)

Tatsuya Shoji

横浜市立大学教授、1961年生。芥川龍之介の〈人〉と〈文学〉を主たる研究テーマとし、出版メディアと作家、読者の関係にも関心を持つ。また、作家が聴いた音楽を蓄音機とSPレコードで再現するレコード・コンサートなども企画・開催。編著書に『芥川龍之介ハンドブック』(鼎書房)、『改造社のメディア戦略』(双文社出版)、『芥川龍之介全作品事典』(勉誠出版)など。

# 四季詩集

## 中也とめぐる 春夏秋冬

中原中也の生涯に360篇ほどの詩を作りましたが、そのなかには季節に触れたものが数多くあります。そこで中也がうたったのは、四季それぞれが持つ風情と、それによってわきあがるさまざまな感情でした。生きることと詩作が強く結びついていた中也にとって、その時々々の季節の感触は、詩にうたう思いを生き生きと伝える上で重要な要素であったといえるでしょう。本展では、季節にかかわる中也の作品を集め、あわせて書簡などからわかる季節ごとの中也の暮らしを紹介しました。



### 第1章 春

ここで紹介した詩では、春のあたたかな雰囲気とともに、時の移ろいや過去の郷愁が表現されています。その一方で、明るくはばかりではない春の一面に目を向けた作品もあり、春に対する中也の皮肉めいた心情もうかがえます。

#### 【紹介作品】

「春の日の夕暮」「春宵感懐」「(と)にもかくにも春である」「(吹く風を心の友と)」「

#### 【主な展示資料】

中原中也原稿「春の夕暮」(ノート1924)、「春」(「と)にもかくにも春である」、「吹く風を心の友と」(「早大ノート」)

### 第2章 夏

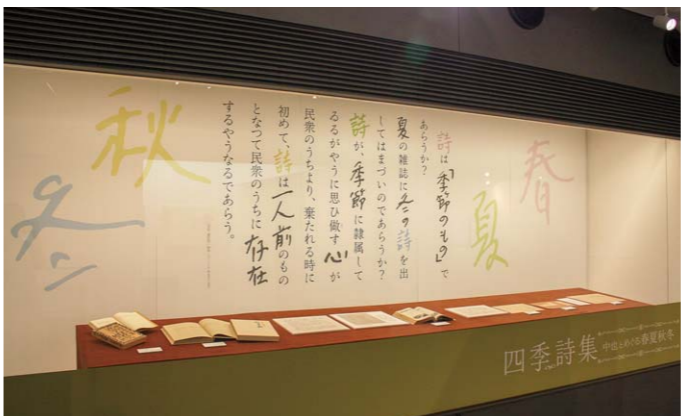
ここで紹介した詩では、初夏の心地よい夜や真夏のけだるい暑さ、澄んだ空気に変わり始める晩夏など、さまざまな夏の風景に、悲しみや切なさといった自らの心情を映し出しています。また随筆「夏」では、夏になるとかきたたえられる旅への思いが綴られ、中也の高揚感が伝わってきます。

#### 【紹介作品】

「初夏の夜」「夏」「逝く夏の歌」、随筆「夏」

#### 【主な展示資料】

中原中也原稿「夏」(ノート小年時)、「青木三造」、安原喜弘宛書簡(昭和7年7月27日付/昭和7年8月15日付/昭和8年7月3日付)、竹田鎌二郎



宛書簡(昭和10年7月23日付)、「詩人時代」昭和10年8月号

### 第3章 秋

四季にかかわる中也の詩のなかで、本文に最も多く登場するのが「秋」です。ここで紹介した詩では、夏から秋へ、生命感を失いながら移り変わる風景や、さまざまな表情を見せる秋空を静かに見つめながら、喪失感や孤独、生と死に向き合う中也の姿があらわれています。

#### 【紹介作品】

「秋」「港市の秋」「臨終」「一つのメルヘン」「漂々と口笛吹いて」

#### 【主な展示資料】

中原中也原稿「秋の日曜」、「曇った秋」、安原喜弘宛書簡(昭和6年10月16日付)、竹田鎌二郎宛書簡(昭和9年9月13日付)、「白痴群」第4号

### ■中也の詩作と季節

中也は四季にかかわる詩を多くのこしました。が、中也にとって、季節の感触を詩に取り入れることは、流れゆく時間や感情をそこによみがえらせ、詩にうたう思いを生き生きと伝える上で重要であったといえるでしょう。中也が詩と季節の関係をどのように考えていたか、日記や書簡の言葉から探りました。

#### 【主な展示資料】

中原中也原稿「三月の風」、中原中也「日記(雑記帖)」「SCRAP BOOK」、「婦人公論」昭和11年9月号

### 第4章 冬

ここで紹介した詩では、雪の降るさまや寒々とした冬らしい風景が印象的に描かれています。そこには中也の止むことのない悲しみや、さみしさの感情が込められています。

#### 【紹介作品】

「雪が降つてゐる……」「冬の夜」「冬の長門峡」「汚れつちまつた悲しみに……」「寒い」



本展で紹介した詩と文章の一部を収めた『四季詩集』を作ることのできるシートを配布。切って折ると豆本風の詩集の出来上がりです。



詩集をめくるように四季の詩を楽しんでいた趣向で展示を構成。

# 大岡昇平と中原中也

2018年8月2日「木」～9月24日「月・祝」



多岐にわたる文学活動により、戦後文学を牽引した作家・大岡昇平。大岡は19歳で中原中也と出会い、以後中也が没するまで交友関係をむすびました。中也没後は中也についての文章を数多く発表。四度にわたり刊行された『中原中也全集』では、すべての編集に名を連ね、中也の詩業の紹介につとめました。本展では、県立神奈川近代文学館所蔵の大岡昇平資料を中心に、大岡と中也の交友と、戦後の大岡の文学活動における中也の位置などについて紹介しました。

協力：県立神奈川近代文学館、KRY山口放送

**展示1** 昭和22年1月、湯田  
―「中原についての探求」のはじまり―

昭和24年に大岡昇平が小説として発表した「中原中也伝―揺籃」は、〈昭和二十二年一月の或る朝、私は山口線湯田の駅に降りた〉という一文ではじまります。それは、大岡のライフワークとなった「中原についての探求」（大岡昇平『中原中也』あとがき）の第一歩を象徴するかのようです。

ここでは、昭和18年に生じた中也詩への関心から、昭和22年の中原家訪問までの期間に焦点をしぼり、大岡の「中原についての探求」のはじまりについて、大岡昇平の初公開原稿などを通じ紹介しました。

**展示2** 大岡と中也の  
けんか交友録

《子供に村正を持たせたような奴》（『危なっかしくて仕方がない』）と友人・青山二郎に評された大岡昇平。一方、酒場でわざわざ他人の席にわりこんでけんかを売る中原中也。二人はたがいに認めあいながらも、顔を合わせるたびにけんかが始まる、という奇妙な関係でした。

ここでは、大岡と中也の生いたちから二人の出会い、そしてその後の独特な交友の実像を紹介しました。

**展示3** 大岡が中也にみたもの  
―戦後の大岡文学と中也―

昭和21年から没するまでのおよそ40年にわたり、大岡は「中原についての探求」を続けました。その過程で生み出された文章は、中原中也の文学的地位を確固たるものとするともに、大岡の文学活動における代表作のひとつとなりました。

ここでは、大岡が書きのこした中也をめぐる言葉をたどりながら、大岡が探求した「中原中也」について紹介しました。

### 《主な展示資料》

大岡昇平草稿「昭和三年の中原中也」、大岡昇平原稿「中原中也」「俘虜記」「野火」「武蔵野夫人」「花影」「レイテ戦記」、大岡昇平手入台本「詩人中也を語る」、大岡昇平遺品復員後に着ていた航空服、中原中也原稿「玩具の賦」、雑誌「白痴群」創刊号・第2号・第6号

映像上映 「中原中也を語る―大岡昇平」（KRY山口放送・中原中也記念館編）

### イベント

8月3日～5日

大岡作品を映画で観る―大岡昇平原作映画特集（共催：山口情報芸術センター）  
会場：山口情報芸術センタースタジオC  
上映作品：武蔵野夫人（溝口健二監督）  
花影（川島雄三監督）  
野火（塚本晋也監督）  
4日 塚本晋也監督トークイベント



塚本晋也監督（トークイベントにて）



企画展 I

# 中也、この一篇——「帰郷」

2018年4月18日〔水〕～7月29日〔日〕



## 展示 1 読んでみよう! 「帰郷」

ここでは、「帰郷」に描かれた風景や(かなし)《風》(年増婦)《あ、おまへはなにをして来たのだと……》といった言葉や、ヴェルレーヌの影響などのキーワードによって詩を読み解き、「帰郷」の魅力に迫りました。

## 展示 2 「帰郷」の背景

「帰郷」が書かれたと推定される昭和2年終わりから翌年初め頃、当時20歳の中也は東京で生活していましたが、病に倒れた父・謙助の見舞いなどのためにたびたび山口に帰省しました。故郷を離れて詩人の道を歩む中也に対し、周囲の人々の視線は時に厳しく冷たいものでした。

ここでは、「帰郷」制作当時の中也の動向や、取り巻く環境を紹介し、作品に映し出された中也の心境に迫りました。

## 展示 3 歌になった「帰郷」

昭和3年、中也は音楽集団「スルヤ」を通じて、作曲を担当していたメンバー、

内海誓一郎と出会い、自作の詩に曲をつけてほしいと依頼します。そこで内海が

選んだ詩が「帰郷」でした。内海は作曲の過程で、曲に不要と考えた(へ)字がなんだか素々として見える、/それから何もかもがゆつくり私に見入る。という詩句を中也の同意の上で削除しました。完成した曲を聴いた中也は「これは自分の故郷の姿だ」と叫んだといいます。

ここでは、内海との出会いによって誕生した歌曲「帰郷」について紹介しました。また、このコーナーで「帰郷」の曲をBGMとして使用するほか、内海が晩年、「帰郷」作曲について語った音声(初公開)を聴くことのできるコーナーを会場内に設けました。

## 展示 4 二つの「帰郷」

昭和7年、中也は第一詩集『山羊の歌』の編集に着手します。「帰郷」については、歌曲制作時に2行を削除した形態を決定稿とし、昭和9年に刊行されました。ここに収められた詩が、今日知られている「帰郷」です。その一方で、中也は削られた2行を復活させた初期形の詩を、「四季」第2冊(昭和8年)に発表しています。

ここでは、「帰郷」の発表形態の変遷について紹介しました。

### 【展示写真】

〔第1期・第2期〕林忠彦撮影写真(佐藤春夫、檀一雄、坂口安吾)

〔第3期〕林忠彦撮影写真(佐藤春夫)

## 展示 4 中原中也と同じ時代を 生きた文学者

ここでは、中也と同じ時代を生きた作家・川端康成、高見順、宇野千代らの写真を展示し、中也との意外な接点を紹介しました。

### 【展示写真】

〔第1期・第2期〕林忠彦撮影写真(川端康成、高見順)

〔第3期〕林忠彦撮影写真(川端康成、宇野千代)

## 展示 5 バー「ルパン」に集う 作家たち(第3期のみ)

ここでは、林忠彦の代表作ともいえる、バー「ルパン」で撮影された太宰治、坂口安吾、織田作之助の写真を展示しました。

### 【展示写真】

林忠彦撮影写真(太宰治、坂口安吾、織田作之助)

### 《その他の主な展示資料》

林忠彦『日本の作家』『文士の時代』『カストリ時代』、河上徹太郎『日本のアウトサイダー』、今日出海『青春日々』、佐藤春夫『退屈読本』、檀一雄『小説 太宰治』、坂口安吾『いづこへ』、高見順『昭和文学盛衰史1』、中原中也『ボン・マルシェ日記』

## 展示 5 「帰郷」詩碑建立

中也没後28年となる昭和40年6月、生家からほど近い井上公園に「帰郷」の詩碑が建設されました。多くの友人や故郷の人々の尽力によるもので、詩の文字は小林秀雄、碑文は大岡昇平が手がけました。中也の業績が故郷の地で讃えられたことを、母・フクはこのほか喜びました。

ここでは、詩碑建設にまつわる家族、友人の思いを紹介しました。

### 《主な展示資料》

中原中也草稿「夏は青い空に……」(ノート小年時)、「冬の日」[Me Yotia]、中原中也『山羊の歌』、『山羊の歌』校正刷り、「スルヤ」第4輯、『世界音楽全集』第27巻『日本歌曲集』、「四季」第2冊、ボオル・ヴェルレーヌ著/河上徹太郎訳『観智』、中原中也詩碑建設記録、西川マリエ宛中原フク封書(昭和40年2月27日)



企画展 II

# 文士の肖像——林忠彦写真展

2018年9月27日〔水〕～2019年4月14日〔日〕

山口県周南市出身の写真家・林忠彦の生誕100年を記念し、周南市美術館博物館協力のもと、林忠彦の写真展を開催しました。

同じ山口県出身でありながら、中也と出会うことはなかった林ですが、小林秀雄、太宰治、坂口安吾ら中也と交友のあった文学者の肖像写真を撮影しています。それらは、『日本の作家』『文士の時代』といった写真集に収められ、林の代表作となりました。

本展では、中也と同時代の文学者の写真を選び、その業績を紹介しながら、林の写真の魅力に迫りました。会期中、三期に分けて展示替えを行い、同じ作家であっても、撮影場所やアングルなどが違う別の写真を展示し、各会期8作品、全24枚の異なる写真をお楽しみいただきました。

## 展示 1 林忠彦紹介

ここでは、林忠彦の略歴や、林が文学者の写真を収め、自身の代表作ともなった『日本の作家』『文士の時代』といった写真集について紹介しました。

## 展示 2 中原中也と 交友の深かった文学者

ここでは、中原中也と関係の深かった文学者・小林秀雄、今日出海、河上徹太郎、大岡昇平らの写真を展示し、あわせて中との関係にも迫りました。

### 【展示写真】

〔第1期・第2期〕林忠彦撮影写真(小林秀雄、今日出海、河上徹太郎)

〔第3期〕林忠彦撮影写真(大岡昇平、永井龍男)

## 展示 3 中也と交友があった 文学者

ここでは、中也と交友のあった作家・佐藤春夫、檀一雄、坂口安吾らの写真を展示し、中也との交友関係を探りました。



林忠彦(写真提供:周南市美術館)



## 中垣竹之助宛 中原中也葉書

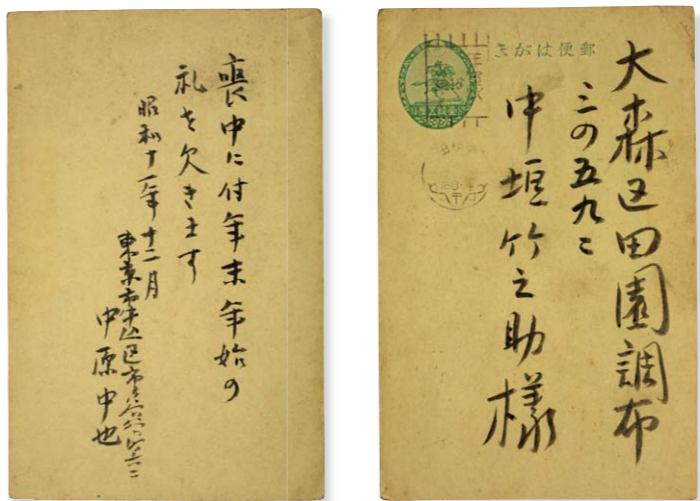
(昭和11年12月 早稲田発信)

昭和11年11月10日、中原中也は愛児・文也を2歳で亡くします。この葉書は、その約1ヶ月後に書かれた喪中葉書で、『新編中原中也全集』編集時には確認されていなかった新発見資料です。

同時期の詩稿「夏の夜の博覧会」はかなしからずや「冬の長門峡」などと同じく、毛筆で墨書されたこの葉書は、文也没後、悲しみの淵に沈む当時の中也の動

向を知る上で、大変貴重な資料です。なお、受取人の中垣竹之助は実業家で、中也のかつての恋人・長谷川泰子の夫にあたります。

この資料は、10月2日(火)から10月31日(水)にかけて開催された「山口お宝展」(山口商工会議所主催)にて期間限定で初公開しました。



## 開館25周年を迎えて

館長 中原豊

中原中也記念館は平成31年2月18日をもって開館25周年を迎えました。

25年という歳月は四半世紀とも表現します。(幾時代)のひとつの区切りを迎えたのだと受けとめることができます。

中也が25歳を迎えたのは昭和7年、第一詩集『山羊の歌』の編集を終えて印刷に取りかかった年でした。版元探しに難航し刊行は2年半後となりますが、中也の詩の世界は25歳の時にひとつの完成を見ていたことになりました。そして、その世界が時代を超えて現在も多くの人の心を動かし続けています。

記念館としても、25周年を機に、これまで培ってきた文学館としての実績をわかりやすくまとめた形で伝えられるとともに、中也の残した言葉が新しく生み出していく様々な表現の可能性を探る展示やイベントを行います。文学館としての活動を伝えるものとしては、25年の展示の歩みとエピソードとなる資料をピックアップしてご紹介する「展示アーカイブ」の公開や資料の修復保存に関するトーク&ワークショップがあります。

また、「文学表現の可能性」をテーマとする開館25周年記念展では、文学をモチーフとして新たな表現の地平を切り開く美術家ムットーニ(武藤政彦)氏、漫画家清家雪子氏の作品を前後期に分けて取り上げます。その他、様々な機会を通じて、記念館の今日までそして明日からの発信していきます。

記念館のこれまでの活動にご助力いただいた多くの方々にお礼申し上げますとともに、今後も引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

## 小林秀雄著作 初版本一式

平成30年、小林秀雄が刊行した著作の初版本一式をご寄贈いただきました(寄贈者・溝淵邦博氏)。小林秀雄は中也と関係が深い文学者であり、日本の近代批評の祖ともいわれる文芸評論家です。

今回ご寄贈いただいた小林の著作本は144点で、昭和初年代の著作『文芸評論』(昭和6年、白水社)、『一つの脳髄』(昭和8年、四季社)、『様々なる意匠』(昭和9年、改造社)、『私小説論』(昭和10年、作品社)、『Xへの手紙』(昭和11年、野田書房)をはじめ、中也が読んだ翻訳書である、ボードレール『エドガー・ポー』(昭和2年、日向新しき村出版部)、ヴァレリイ『テスト氏』(昭和9年、野田書房)、アラン『精神と情熱とに関する八十一章』(昭和11年、創元社) などもあります。

なかでもランボオの翻訳は、『酩酊船』(昭和6年、白水社)、『アルチュール・ランボオ詩集』(昭和8年、江川書房)、『渇の喜劇』(昭和12年、野田書房) など初期のものから、歴代の『地獄の季節』や『ランボオ詩集』が揃っており、小林の翻訳の業績が一望できます。

また、戦後の著作も初版から改訂版まで集められており、中には、『モオツァルト』の「著者版」(昭和50年、槐書房)や「限定A版」(同上)、『無常といふ事』の「特別限定版」(昭和48年、槐書房)、『本居宣長の「限定版」(昭和54年、新潮社)といった、限定本や署名本も多く含まれています。

小林の業績を網羅した貴重な資料であり、同時に近代文学における一級資料であるといえます。

※寄贈者の溝淵邦博氏は平成31年1月に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。



## 資料修復

### 資料修復保存事業について

中原中也の原稿や書簡、日記など、館蔵の紙資料には酸性紙で作られているものが多くあります。

酸性紙はそのままにしておくと酸性劣化が進み、徐々に変色し最後はポロボロに崩れてしまいます。また、インク焼けという深刻な問題もあります。古いブルーブラックインクには鉄が含まれているため、酸化によって筆跡部分に穴が開いたりする場合があります。

最近、館蔵資料の酸性劣化がいちじるしく、一刻も早い対策が必要となっていました。

また、原稿や書簡は、焼け焦げや、破れ・穴開きが見られ、ノートや日記には、綴じが壊れてしまったものなどがあり、展示や閲覧、他館への貸出などに支障が出ていました。

中原中也記念館では、平成27年度から修復や劣化防止処置を専門業者に委託し、現在のところ直筆資料の大半と、貴重雑誌の一部は修復を終えました。今後も館蔵資料の修復と劣化防止処置を進めていきます。



修復後原稿(裏面)

(写真提供: HATA Studio)



ステープラー除去作業



修復前原稿(表面)

- 4月1日 特別展示:震災復興応援企画(前年度から継続)  
当館と福島市およびNPO法人「創る村」との交流事業を紹介
- 18日 企画展I「中也、この一篇——「帰郷」」(~7月29日)  
特別展示:第23回中原中也賞(~5月27日)  
マーサ・ナカムラ「狸の匣」
- 27日 第167回 中原中也を読む会  
第23回中原中也賞受賞詩集 マーサ・ナカムラ「狸の匣」を読む
- 29日 生誕祭「空の下の朗読会」(中原中也記念館前庭)  
自由参加の朗読(朗読参加者40名)  
VOICE SPACE コンサート  
第23回中原中也賞贈呈式(湯田温泉ユウベルホテル松政)  
記念講演「中原中也の愛」  
講師:太田治子  
主催:山口市、(公財)山口市文化振興財団
- 5月25日 第168回 中原中也を読む会  
屋外展示「花の詩」(前期)——「夏の日の歌」「少女と雨」を読む
- 6月22日 第169回 中原中也を読む会  
企画展I「中也この一篇——「帰郷」」見学
- 7月27日 第170回 中原中也を読む会  
福田百合子名誉館長と「汚れつちまつた悲しみに……」を読む
- 8月2日 特別企画展「大岡昇平と中原中也」(~9月24日)  
オープニングセレモニー開催
- 3日 大岡作品を映画で観る——大岡昇平原作映画特集(~5日)
- 4日 塚本晋也監督トークイベント
- 18日 プロムナード・トーク① 特別企画展解説
- 24日 第171回 中原中也を読む会  
特別企画展「大岡昇平と中原中也」見学
- 26日 機関誌「中原中也研究」第23号発行
- 9月1日 プロムナード・トーク② 特別企画展解説
- 15日 公開講演「創造的チャランボラン」(セントコア山口)  
講師:島田雅彦  
共催:中原中也の会
- 23日 プロムナード・トーク③ 特別企画展解説
- 27日 企画展II「文士の肖像——林忠彦写真展」(~2019年4月14日)
- 28日 第172回 中原中也を読む会  
大手拓次の詩を読む
- 10月2日 山口お宝展(~10月31日)  
中垣竹之助宛中原中也書翰(昭和11年12月)展示  
共催:山口商工会議所
- 10月8日 企画展II 展示解説~文士篇~①

- 20日 メイシ交換会(中原中也記念館前庭) (~21日)
- 21日 第3回 ぼうしの詩人賞~あつまれ!未来の中也たち!~  
表彰式・入選作品朗読会  
入選作品展示(~2019年1月27日)  
中也忌~中也に捧げる夕べ(中原中也記念館)
- 22日 中也命日・墓前祭(経塚墓地)
- 26日 第173回 中原中也を読む会  
企画展II「文士の肖像——林忠彦写真展」見学
- 11月23日 第174回 中原中也を読む会  
屋外展示「花の詩」(後期)——「盲目の秋」「疲れやつれた美しい顔」を読む
- 12月1日 山羊の日(~12月9日)  
特別展示:矢追順子宛中原中也献呈署名入り「山羊の歌」
- 8日 企画展II ゲスト・トーク~写真篇~  
解説:松本久美子
- 21日 第175回 中原中也を読む会  
蓄音器で聴く中也ゆかりの音楽
- 2019年  
1月13日 企画展II 展示解説~文士篇~②
- 18日 「中原中也が結ぶ 福島と山口の絆」事業  
講演「大蔵小学校を卒業する皆さんへ」(山口市立大蔵小学校)  
講師:和合亮一  
共催:山口市立大蔵小学校PTA、大蔵自治振興会
- 25日 第176回 中原中也を読む会  
「冬の長門峡」を読む
- 2月18日 開館25周年
- 20日 第16回テーマ展示「四季詩集——中也とめぐる春夏秋冬」  
(~2020年2月11日)
- 22日 第177回 中原中也を読む会  
中也の日記・書簡を読む
- 23日 中原中也記念館開館25周年記念イベント  
もちまき  
わたしの四季詩集 詩の創作ワークショップ  
講師:渡辺玄英
- 27日 特別展示:「嘉村礪多と関東大震災」  
全国文学館協議会加盟館との共同展  
「3.11 文学館からのメッセージ」への参加企画(~3月24日)
- 3月21日 企画展II 展示解説~文士篇~③
- 22日 第178回 中原中也を読む会  
テーマ展示「四季詩集——中也とめぐる春夏秋冬」見学
- 31日 館報第24号発行

中原中也の会

- 5月19日 中原中也の会第22回研究会  
「吉本隆明と中原中也——シリーズ 戦後詩人と中原中也2」  
(県立神奈川近代文学館)  
総司会:加藤邦彦  
パネルディスカッション「吉本隆明の出發 あるいは 出發としての中也」  
パネリスト:川鍋義一、疋田雅昭  
講演「中原中也と四季派と吉本隆明」  
講師:鹿島茂
- 7月31日 会報第44号発行
- 9月15日 中原中也の会第23回大会  
「大岡昇平の戦争と中原中也」(セントコア山口)  
総司会:権田浩美

- 講演「創造的チャランボラン」  
講師:島田雅彦  
パネルディスカッション「大岡昇平、詩と小説のはざままで」  
出演:立尾真士、カニエ・ナハ  
司会:蜂飼耳
- 16日 中原中也の会第19回セミナー(セントコア山口、中原中也記念館)  
「受け継がれる中原中也——中也没後50年祭の映像で見る大岡昇平」  
講師:池田誠  
中原中也記念館特別企画展「大岡昇平と中原中也」見学  
解説:池田誠
- 12月25日 会報第45号発行

第3回 ぼうしの詩人賞

あつまれ!未来の中也たち!



- ぼうしの詩人賞・最優秀賞  
牛島 惇 さん
- 優秀賞  
上田 大翔 さん  
又野 衣織 さん  
中村 彩乃 さん  
藤田 康太郎 さん
- 館長賞  
井上 終亜 さん  
松井 琉惺 さん

「ぼうしの詩人賞」あつまれ!未来の中也たち!は山口市内の小・中学生が「中原中也」や「詩」に触れる機会をつくるために、平成28年に創設された創作詩のコンクールです。第3回目の今回は、応募作品52篇の中からぼうしの詩人賞(最優秀賞)1篇、優秀賞4篇、館長賞2篇が選ばれました。

中也忌にあわせて表彰式と入選者本人による作品朗読会が行われ、ぼうしの詩人賞には、中也がかぶっていた帽子にそっくりの黒い「詩人のぼうし」が贈られました。それぞれの表彰後、朗読を好んだ中也にならない自作の詩を声に出して伝えることで、一度書き終えた詩に向き合うきっかけになり、そうやって少しずつ「詩人」に近づいていくのかもしれない。

記念館ニュース

中也忌~中也に捧げる夕べ

中原中也の命日10月22日に行う追悼イベントのひとつとして、毎年「中也に捧げる夕べ」と題し、閉館後の中原中也記念館でコンサートを開催しています。今年も命日の前夜、10月21日に、山口県ハーモニカクラブから、品川勝邦氏と吉本小百合氏をお招きして、ハーモニカコンサートを行いました。

品川氏は、ハーモニカの名人であった中也の末弟・伊藤拾郎氏に師事した方であり、演奏の合間には、拾郎氏の人柄が伝わる楽しい思い出話も語られました。なお、平成30年は拾郎氏生誕百年の節目の年でもありました。演奏された主な曲目は、拾郎氏が品川氏によく弾いて聴かせてくれたという「荒城の月幻想的変奏曲」のほか、「浜辺の歌」「シューベルトの子守歌」「出船夜想曲」「宵待草」「ロングロングアゴー」「枯葉」など、全部で15曲。最後に童謡「故郷」をハーモニカの伴奏で観客の皆さまと一緒に歌い、和やかに中也を偲ぶ夜が過ぎていきました。

平成30年度の中也忌では、このほかに山口市立大学の学生による「メイシ交換会」、「墓前祭」もあわせて行いました。



「山羊の日」特別展示

中原中也「山羊の歌」(矢追順子宛献呈署名入り) 平成30年12月1日(土)~9日(日)

昭和9年12月10日、中原中也の第一詩集「山羊の歌」が、編集開始から2年半の月日を経てようやく刊行されました。中原中也記念館では、中也にとって記念すべきこの日を「山羊の日」と名付け、12月1日から9日まで、矢追順子宛献呈署名入り「山羊の歌」の特別展示を行いました。

この資料は平成30年6月に個人の方から当館に寄託されたもので、この度の展示が初公開となりました(寄託者・立花純夫氏)。

当館では、現存する献呈署名入り「山羊の歌」のうち20冊を把握していますが、そのうち女性宛のものには、本書と中也の親戚である西川マリエ氏宛の2冊しかありません。また、献呈された人物のうち、中也との関係はもとより、どのような人物かも全く不明なのは矢追順子氏のみです。展示にあわせて矢追氏について広く情報提供を求めたところ、複数の新聞に取り上げていただき、それにより貴重な情報が寄せられました。情報提供にご協力くださいました方々に御礼を申し上げます。

当館では、引き続き調査を進めております。何かご存じの方は情報をお寄せください。



## 第24回中原中也賞

# 『する、されるユートピア』

井戸川射子氏



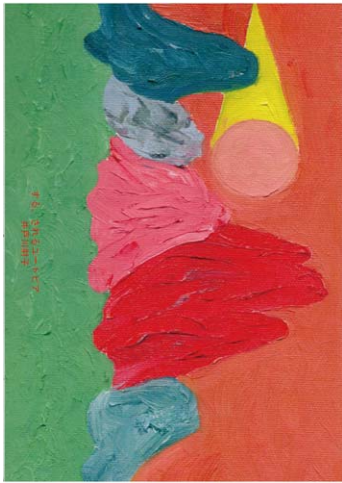
## 第24

24回の中原中也賞は、公募および推薦による218点の詩集の中から、井戸川射子氏の『する、されるユートピア』（私家版）が選ばれました。

井戸川氏は昭和62年兵庫県生まれの31歳（受賞時）。関西学院大学社会学部社会学部福祉学科において死生学を学び、卒業後兵庫県で国語教諭として勤めるかたわら、雑誌などへ詩を投稿しています。

受賞作『する、されるユートピア』は井戸川氏の第一詩集で、「川、腰までつかるほどの」他全22編が収められています。選考会では、最終選考に残った6冊の詩集の中で高い評価を集め、活発な討議の末、全員一致で選出されました。

母の死という一貫したテーマを持ちながら、収録されたどの作品においてもそれを表面に出していない。悲しみの抒情にもたれず、むしろ機嫌よく言葉を観察している力量は、素晴らしい。「手のひらは強く握っても／すぎ間は絶対なくならない」など、作者特有の鋭い言葉のセンスは新鮮。（選評より）



Nakahara  
Chūya  
prize 24<sup>th</sup>

あと何回、硬くなる体に驚くだろう  
痛くなるのは、  
たとえばどうして腕ではないんだろう  
水の中では全てが膨張スローで、  
対面すれば動きはもっと速いはずだ  
「固着して動かない種もいる」地面で互いにひとつつながり、  
表面に区別などないのかな  
僕も同じ、集合だ、まとめられた愛だ  
説明がほしいと、いつも思っている  
会えなくなっても、動き方まで覚えておける？  
筋肉も落ちて骨の形にくぼんで、  
入り江みたいだったな  
中身も消えてこんなにあざやかな貝殻だ  
周りの人がぼくくらい悲しくいますようにと、  
願わなくてもたぶんその通りだ

（「川、腰までつかるほどの」より）

### ◎平成31年度 記念館事業・関連行事予定

2019年4月 - 2020年3月

展示	イベント・記念日	中原中也を読む会
平成30年度企画展Ⅱ 「文士の肖像—林忠彦写真展」 (2018年9月27日～2019年4月14日)  第16回テーマ展示 「四季詩集 —中也とめぐる春夏秋冬」 (2月20日～2020年2月11日) ※特別企画展会期中を除く  企画展 「沸騰する精神 —詩人・上田敏雄」 (4月17日～7月28日)	特別企画展 「富永太郎と中原中也」 (8月1日～9月23日)  開館25周年記念展「文学表現の可能性」(前期) 「ムットーニからくり文学館」 (9月26日～11月24日)  開館25周年記念展「文学表現の可能性」(後期) 「清家雪子展 —『月に吠えらんねえ』の世界」 (11月27日～2020年4月12日)  第17回テーマ展示 「教科書で読んだ中也の詩」(仮) (2020年2月14日～2021年2月中旬)	毎月 第4金曜 中原中也記念館等  中原中也の会  中原中也の会第23回研究集会 (5月18日 國學院大學院友会館)  中原中也の会第24回大会・ 特別企画展見学 (9月14日 ホテルニュータナカ) (9月15日 中原中也記念館)
	湯田温泉 白狐まつり (4月6日、7日)〈無料開館日〉  生誕祭 空の下の朗読会 (4月29日 中原中也記念館前庭)〈無料開館日〉  中原中也記念館開館25周年 VOICE SPACE CONCERT TOUR 2019 (7月5日 山口市市民会館小ホール)  中也忌～墓前祭と中也に捧げる夕べ 中也命日・お墓参り (10月22日)〈無料開館日〉  山羊の日(第一詩集『山羊の日』刊行日) (12月10日)  開館26周年 (2月18日)〈無料開館日〉	※日程等、変更の場合もございます。

中原中也記念館 館報【第24号】平成31年3月31日

発行◎ 中原中也記念館 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉一丁目11-21 TEL 083-932-6430 FAX 083-932-6431 E-mail: chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/

環境に配慮し、用紙には再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。